

梅鶯仏教壮年

第30号
2006年
1月8日

新年のご挨拶

会長 北村喜代信

新年明けましておめでとうございませう。今年も梅鶯仏教のみなさまには、平成十八年の輝かしい新春を、ご家族お揃いでお迎えのことと、お慶び申し上げます。さて、昨年は経済の復調が云われ始め、明るい兆しが見えてまいりました。しかし、一方では、いつたい何を信頼し、何に安心したらいいのか訳のわからない社会の出来事でいっぱいでした。自然災害をはじめ、いろんな事件、事故が多発しました。なかでも幼い子供達を狙った犯罪、それも連鎖して起こる異常さ、痛ましさに世の中を震撼させ、まさに何でもありの世の中になってしまった感がありました。そのような中であって、私たち梅鶯仏教壮年会は心の豊かさを求め、情操の向上を追求し、人間として、本当の幸せをいただくため、精進する大切さを広めてまいりたいと思います。継続は力なり、本年も去年同様の活動を続けてまいりたいと思っております。お念仏を称え、ご法話をお聞きし、ともに語り合い行動してまいりましょう。この新しい年が皆さまにとってどうぞす



竹取り、雪かき、リハーサルと大変な準備でしたが、素晴らしい聖夜を演出していた

ばらしい年となりますよう、お念じ申し上げます。新年のご挨拶といたします。肌をさす冷気につつまれて、揺らめく「竹灯籠」。とても幻想的な除夜でした。行く年来る年に思いを馳せ、悠久の時の中で感じる確かなひととき。こぞって唱和する「正信偈」の中で、あらたまの新春を迎えました。

春は称名に入って
口初めて開く
声は高し 無量寿如来

次回例会

期日 1月22日(日)

夜 7時〜8時半

プログラム

お勤め・法話

話し合い

仏教讃歌練習

・ ちかいのうた
・ 念仏

◎話し合いテーマ



題材法話

*前号からのつづき

◇私の心の本質

敬慕してやまない親鸞聖人から、「往生のため千人の人を殺しなさい」と、千人でも殺すことを仰せられ、たとえ聖人のおことばでも、たとえ千人はおろか一人でも殺すことなど私にはできません」と答えます。そこで親鸞様は唯円坊に仰せられます。「そうであるうとも。自分の判断だけで全てのことができるのならば、往生のため千人殺せと云われれば、それこそ、そうできないう。けれども、その条件が整っていないのは、かならず、唯円坊の心は本来的に良いからなのではない、業縁が伴っていないからなのです。に業縁が伴えば百人でも千人で



も殺しかねないのが私たちなのです。」と。原文では「わがころのよくて、また害せじとおもうとらず、百人・千人をころすことも、もあるべし」という文章で、痛烈に人間の本质を述べておられます。で、つまり縁が整えば何をしかすか分らない、危なれる私達一人ひとりなので、念仏者としての生活「ただし、だからといって、どんな罪でも業縁なのだから仕方ない」と考えるなら、それはまた大きな間違いで、親鸞聖人はこのよくな浅ましき凡夫を、必ず助けるとのご本願に出会ったならば、「薬あれば」と毒をこのむべからず」と仰せられます。さがつまり、わが身の浅ましさが知らされ、弥陀のご本願に出会えたならば、「恥ずべし、傷むべし」との念仏者の生



活姿勢が生ずるのです。暴走族の少年達の犯したむごい犯罪は、社会生活の中で決して許されるものでありません。けれど、そんな少年達でも、最初から、なんの意味も値打ちもない命として生まれてきたはずはないのです。少年達にもたらされた業縁こそを、私達一人ひとりの問題として考えなければならぬのだと思います。◇阿弥陀様の願い阿弥陀様は、殺された少年の命にも、暴走族の少年の命にも、犬のウンコや産業廃棄物にさえも、かけがえのない意味を問いかけてくださっているのです。暴走族の少年達の命にさえも、かけがえのない意味があるからこそ、彼らに殺された少年の命の尊さがよく鮮明に浮かび上がってくるのであります。命の尊さに気がつくとき、そして



て、一人ひとりの命が阿弥陀様の願いの中に生かされていると気がつかせていただくとき、はじめて私のいのちも、他人（ひと）の命も互いに尊く、大切にしなければならぬ命であることに気がつかせていただけのようです。そこに念仏者としての社会生活があるのです。平成17年梅鸞仏壮報恩講 住職法話より
\$\$\$
過ぎし「昨日」は去りて無ければ、クヨクヨしても、さらに詮（せん）なし。
まだ来ぬ「明日」は不確定（ふたしか）なれば、当（あ）てにしては外れることあり。
確かなるもの―当てになるもの―それは「今日」のみ―この日のみ。
この確かなる「今日」のこの日を、過ぎし過去の何れの日よりも、充実したる「一日（ひとひ）」となそう。
寺川幽響先生